

弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ

中村大介（埼玉大学人文社会科学研究所）

1. はじめに

弥生時代は佐原眞（1970）の研究以来、水稻農耕が開始した時代と定義されている。しかし、古墳時代が始まるまでの道のりは縄文時代の一万年以上と比べて短いにも関わらず、変革の連続であった。水稻農耕導入を皮切りに、青銅器及び鉄器の導入、弥生時代中期後半に顕在化する階層化社会、後期以降の地域間競合など、国家形成につながる基礎が形作られたのはまさに弥生時代である。今回はその中でも大きく社会を変える要因になった農耕を導入する前後の段階について、朝鮮半島の様相をみつつ、概要を述べたい。なお、編年と併行関係については表1に示した。

2. 体系的な変化

弥生時代が始まると、食料獲得方法、集落、墓、土器、石器といった文化を構成する諸要素がほぼ全て刷新される（図1）。食料獲得方法はそれまでのあった狩猟採集から水稻農耕に変わり（図2）、集落は防御性をもつ環濠集落に変わる。墓は支石墓や木棺墓が現れ、土器は開放型の野焼きから覆い型野焼きに変わり、石器は大陸系磨製石器と呼ばれるセットになる。こうした新しい文化的要素は直接的には朝鮮半島から導入されたことが知られている。ただし、西日本であっても土器は朝鮮半島の無文土器そのままではなく、異なる様式が形成され、石器は打製石器が残存し、利用され続ける（図3）。つまり、在来の縄文文化の影響も残るのである。

このように根強く残った縄文文化であったが、全体を変えなければならなかった二つ要因がある（中村2012）。まず一つは気候変動である（図4）。前850年以降、中央アジアから東アジアでは乾燥化していき、新しい生活方法に変わる地域が増加する。日本列島もその例外ではなく寒冷化したと考えられている（甲元2008、大貫2017）。いま一つは、朝鮮半島での人口増加である。朝鮮半島ではすでに農耕社会が始まっており、集落が急増していた。端的には渡来者と在来者の利害が一致したため、縄文時代の生業を放棄し、朝鮮半島からイネ、アワ、キビといった穀物を導入が達成されたのである。

3. 文化的起源

水稻農耕は長江流域を起源として、山東半島と遼東半島を経由し、朝鮮半島に導入される

(図 5、宮本 2009)。朝鮮半島の青銅器時代早期は前 13 世紀頃であり、その段階の土器からイネが確認されている(図 5b・6、孫・中村・百原 2010)。また、それ以前の新石器時代から華北型農耕と呼ばれる雑穀栽培が入っていた。そのため、朝鮮半島の農耕は、水稻・雑穀複合型で、弥生時代に併行する青銅器時代後期以降にも継続している。ただし、農耕の存在を示す石包丁は型式からみて雑穀農耕が主体であった遼東地域から来ており(古澤 2018)、雑穀の利用は単純に新石器時代からの継続とはいえない。

日本列島に農耕が拡散する前の朝鮮半島の様相をみてみると、様々な変化を経ていたことがわかる。まず、青銅器時代早期から前期前半まで、人々は河川沿いの平野に居住していた(図 6)。しかし、前 10~9 世紀頃の前期後半になるとほぼ全ての集落が丘陵に移る(図 7・8)。青銅器時代前期後半の集落は、住居数が著しく多いものを含んでおり、人口増加が顕著である。青銅器時代後期になっても平野に展開する事例は、晋州大坪里(図 9)、馬山網谷里(図 10)など南端を除き、稀である。この点は西日本とは大きく異なるといえよう。また、前者では広大な畠も確認されており、後者では北九州の突帯文土器を模倣したものが確認されている(図 10-2)。他にも北部九州の夜臼式の大壺が達城坪村里にあり、近年になってようやく弥生文化の形成は一方的な渡来ではなく、相互交流の側面があることが分かってきたといえる(中村 2016)。

墓については、石槨墓(図 11)や支石墓(図 12)が出現し、副葬品を多くもつ墓も散見されるようになる。注目すべきは、遼東地域を経由して影響を受けた遼寧式銅剣とそれを模倣した石剣がみられるようになることであり(図 13)、すでに青銅器を入手できる社会になっていたことである。

土器は早期の突帯文土器、前期の孔列文土器と二重口縁土器、後期の砲弾形土器と外反口縁土器に変化するが、少なくとも前期には覆い型野焼きが導入されている。また、煮沸具は粗製、小型土器は精製であることが多く、後者の丸底の赤色磨研壺は墓での副葬にも多用される重要なものである(図 14a)。なお、副葬品は石剣、石鏃、碧玉製管玉、天河石製勾玉・平玉、赤色磨研壺が一般的にみられ(図 14b)、日本列島にも伝わってゆく。

4. 日本列島への拡散と変容

縄文時代にもクリなどの堅果類の管理や、ダイズやアズキといったマメ類の栽培が行われていた(図 15)。縄文時代後期には東日本から西日本の後者のセットが広がる(図 16、佐々木 2014)。ただし、前述したように気候変動の影響からか、マメ類の栽培は維持されるものの、主体であった堅果類獲得は維持されず、新しい生業体系である弥生文化が始まる。

近年では土器圧痕の研究が大幅に進展し、植物遺体や水田が発見されていない遺跡からも穀物が確認されるようになった(表 1)。現状ではイネは山陰地方の初期突帯文土器段階(縄文時代晩期末)から出現する(図 17b、中沢 2017)。北部九州では現時点ではこの時期にアワ(図 17a、中沢 2017、小畑 2019)がみられ、弥生時代早期からイネ、アワ、キビが出揃い、その後はイネが主体となっていく。瀬戸内地域では、徳島県の庄・蔵元遺跡で弥生時代前期中葉には畠と水田がみられ(図 18、中村 2009)、複合型の農耕が行われている。最初

に朝鮮半島と同じ複合型農耕が導入され、環境に合わせて水稲農耕に特化したり、複合型を保ったりしたのだろう。注意したいのは、東北地方を除いて、土器様式が大きく変わる、つまり弥生時代が始まる前に穀物を導入していた点である（表 1）。本格的な導入前に 100 年以上の試行錯誤の段階があったと推定される。また、関東地方に関しては立地的に本格的な水田は難しいが、中期中葉の中里遺跡が出現する前に複合型の農耕に移行している。条痕文土器からみて東海地方の影響といえるだろうか（図 19、横浜歴史博物館・他 2017）。

墓制に関しては、九州地方では支石墓など、朝鮮半島から来た墓制を採用するが、地域的に偏りがある（図 20、中村 2016）。これは人骨の形質差（図 21、大阪府弥生文化博物館 2011）ともある程度一致することから、渡来人との混血に対してすら、選択が働いていたといえる。さらに、朝鮮半島で一般的な武器副葬は少ない。赤色磨研の小型壺ですら、当初は墓壙にいれる副葬を避け、墓壙上面に供献していた（図 22、中村 2012）。人骨の形質の差異も含め、在地における様々な選択が働いていたことがわかり、墓制においてはそれが顕著であった。東日本における弥生再葬墓の成立もそうした選択の一環なのだろう。

5. まとめ：弥生文化形成の重要性

日本列島に農耕が導入される際、朝鮮半島ではすでに青銅器を入手し、製作しているが、日本列島には弥生時代前期末・中期初頭までほぼもたらされない。北九州市の貫川遺跡において黒川式新段階に青銅器時前期末の長舟形石包丁が入っているように、まずは農耕導入の試行があり、副葬習俗の導入が遅れるように、当初から奢侈品を入手しようとしていたのではない。比較的、大規模な水田を営む近畿地方であっても弥生時代後期まで副葬品は稀である。東日本においてもまずは農耕の導入が優先され、青銅器獲得は次の段階である。

しかし、青銅器が導入されたのちは、原料を海外に求め、北部九州では厚葬墓が目立ち始める。戦闘の増加も含め、農耕社会への転換が大きく社会構造と思想を変えたといえようか。結果として東アジア世界に思想的にも経済的にも繋がることになったが、それこそ弥生文化形成の大きな意義であり、近代の文明開化と並ぶ大きな変化といえよう。

註

- 1 自己のこれまでの見解に従って（中村 2012）、ここでは弥生時代の開始を前 8 世紀としておく。宮本一夫も同様の年代であったが（宮本 2009）、近年、宇木汲田遺跡のイネ炭化種子の AMS 年代から前 9 世紀に遡るとしている（2018）。ただし、AMS 年代の IntCal13 により較正は日本産樹林年輪による較正よりも平均して 20~30 年、場合によっては 50 年以上古く出る（中村・他 2017）。トルコでも前 800-750 年において 50 年ほど古く出るという（尾寄 2012）。
- 2 宮地聡一郎（2017）は黒川式新段階と刻目突帯文単純段階を時期的に区分するが、宮本一夫（2017）は福岡平野では同時期としている。14C 年代は重複することもあるが（小畑 2019）、土器編年上は混入の可能性や個々の浅鉢の型式的な差異も含めて難しい問題である。今後の課題としたい。

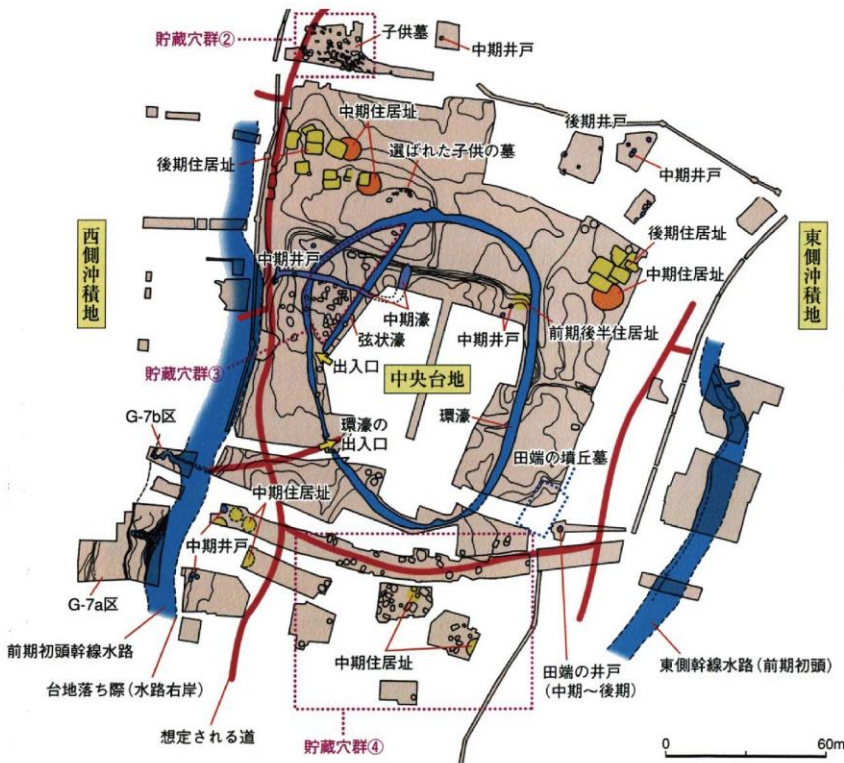
引用・参考文献

- 今村峯雄・藤尾慎一郎 2009 「弥生文化成立期の自然環境」『弥生時代の考古学』2, 同成社
- 大阪府立弥生文化博物館 2011 『弥生文化のはじまり』
- 大貫静夫 2017 「弥生開始年代論」『季刊考古学』138号, 雄山閣
- 尾寄大真 2009 「日本版較正曲線の作成と新たな課題」『新弥生時代の始まり 4』雄山閣
- 尾寄大真 2012 「樹木年輪から読み取る」『Ouroboros』Vol.17 No.2
- 小畑弘己 2019 「農耕受容土器の圧痕法による潜在圧痕検出とその意義」『農耕文化複合:形成の考古学④』雄山閣
- 韓国考古環境研究所 2010 『燕岐松院里・松潭里遺蹟』
- 慶南発展研究院歴史文化センター2009 『馬山網谷里遺蹟』
- 河仁秀・小畑弘己・真邊彩 2012 「東三洞貝塚の櫛文土器圧痕分析と穀物」『新石器時代の貝塚文化』韓国新石器学会
- 甲元眞之 2008 「気候変動と考古学」『熊本大学文学部論叢』97
- 高麗大学校発掘調査団 1999 『湊沙里』第5巻
- 国立晋州博物館 2002 『青銅器時代の大坪里・大坪人』
- 佐々木由香 2014 「縄文時代の植物利用：新しい研究法からみえてきたこと」『ここまでわかった縄文時代の植物利用』新泉社
- 設楽博己 2014 「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185号
- 下條信行 2014 「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開：宇木汲田貝塚 1984年度調査出土石器の報告を兼ねて」『九州文化史研究所紀要』31
- 全南大学校博物館 1993 『麗川平呂洞サンボン支石墓』
- 孫峻鎬・中村大介・百原新 2010 「複製法を利用した青銅器時代土器圧痕分析」『野外考古学』第8号
- 東亜大学校博物館 1999 『南江流域文化遺跡発掘図録』
- 中沢道彦 2017 「日本列島における農耕の伝播と定借」『季刊考古学』138号, 雄山閣
- 中村豊 2009 「西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果」『年報 I』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財研究室
- 中村大介 2012 『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房
- 中村大介 2016 「支石墓の多様性と交流」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
- 中村俊夫・増田公明・三宅美沙・箱崎真隆 2017 「日本産樹木年輪 14C年代データの IntCal13 との比較と活用」『名古屋大学年代測定研究』1
- ハノル文化遺産研究院 2012 『広州駅洞遺蹟』
- 古澤義久 2018 『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房
- 宮地聡一郎 2017 「西日本縄文晩期土器文様保存論」『考古学雑誌』第99巻第2号
- 宮本一夫 2009 『農耕の起源を探る：イネの来た道』吉川弘文館
- 宮本一夫 2017 『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社
- 宮本一夫 2018 「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』第100巻第2号
- 山崎純男 2008 『最古の農村：板付遺蹟』新泉社
- 横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市三殿台考古館編 2017 『横浜に稲作がやってきた!!』横浜市歴史博物館

表1 縄文時代晩期末から弥生時代前期の編年と穀物圧痕の状況(設楽2014を基本として中村2012, 中沢2017, 宮地2017から改変)

朝鮮半島	北部九州	山陰	中国	近畿	東海	中部高地	南関東	北東北
青銅器時代前期末	黒川式(新)	原田式(新)	谷尻式	篠原式(新)	元刈谷	佐野 I b 式	安行 3c 式	大洞 C1 式(新)
青銅器時代後期前半 (休岩里式)	長行段階 江辻段階	桂見 I 式	前池式	滋賀里 IV 式	突 西之山式	佐野 II a 式	安行 3d 式・前浦式	大洞 C2 式(古)
	山ノ寺/夜臼 I 式	桂見 II 式	津島岡大式	口酒井式	帯 馬見塚 F 地点式	佐野 II b 式		大洞 C2 式(新)
青銅器時代後期前半 (松菊里式)	夜臼 II a 式 夜臼 II b 式/板付 I 式 板付 II a 式	古市川原田式	沢田式	船橋式	文 五貫森式	女鳥羽川式	浮 桂台式	大洞 A1 式
	板付 II b 式	古海式	遠賀川式(古)	遠賀川式(古)・長原式	土 馬見塚式	離山式/氷 I 式(古)	千網式/荒海 1 式	大洞 A2 式
初期鉄器時	板付 II c 式	弥生前期 2 式	遠賀川式(中)	遠賀川式(中)・水走式	器 遠賀川式(中)・榎王式	条 氷 I 式(中)/(新)	痕 荒海 1 式/2 式	大洞 A' 式
		弥生前期 3 式	遠賀川式(新)	遠賀川式(新)	遠賀川式(新)・水神平式	文 氷 II 式	荒海 3 式/4 式	砂沢式

太線：弥生時代開始 ■：雑穀 ■：イネ or イネ+雑穀



a. 環濠集落 (福岡 板付遺跡, 山崎 2008)



c. 支石墓 (長崎 大野台支石墓, 中村撮影)



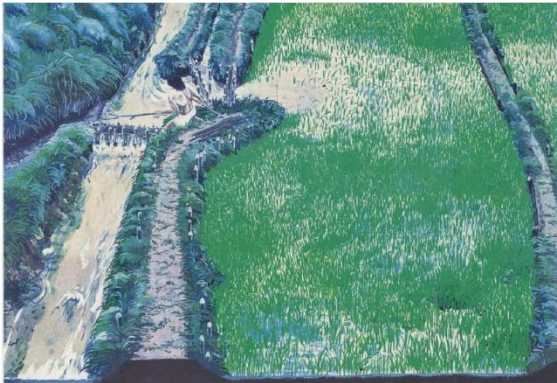
b. 大陸系磨製石器 (高知 田村遺跡, S=1/4)



d. 弥生早期土器 (福岡 曲り田)

b: 季刊考古学 135 号のカラー口絵: 出原恵三構成, 高知県立歴史民俗資料館提供
d: 季刊考古学 135 号のカラー口絵: 庄田慎矢構成, 九州歴史資料館提供

図1 弥生時代の新たな遺構と遺物

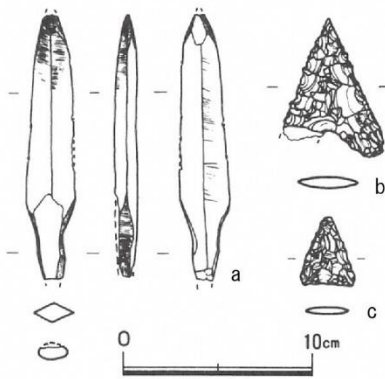


a. 福岡 板付遺跡の復元図（早期，山崎 2008）



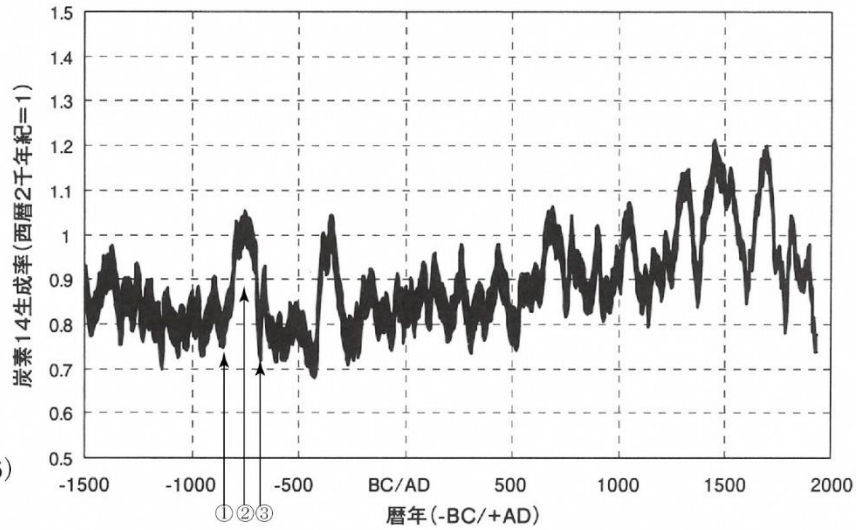
b. 奈良 秋津遺跡（前期，中村撮影）

図2 弥生時代の灌漑施設と水田



a・b：弥生時代早期（佐賀 宇木汲田）
c：弥生時代中期（佐賀 宇木汲田）

図3 弥生時代の石鎌（下條 1986）

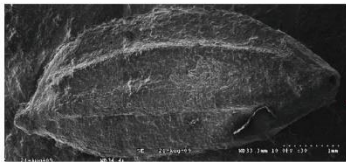


①の前850から寒冷化，②の前750がピークで③まで相対的温暖化（大貫 2016）

図4 大気における炭素生成率の変動（今村・藤尾 2009）



a. 大連 大嘴子遺跡（イネ）



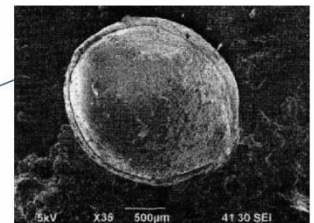
b. 河南 漢沙里 15号住居（イネ）



e. 福岡 板付遺跡（イネ）



c. 阜新 查海遺跡（磨盤・磨棒）



d. 釜山 東三洞貝塚（キビ）

a：大連市文物考古研究所 2000 b：孫・中村・百原 2010 c：遼寧省文物考古研究所 2012
d：河・小畑・真邊 2012 e：山崎 2008

図5 東アジアの農耕拡散（宮本 2009 に加筆）

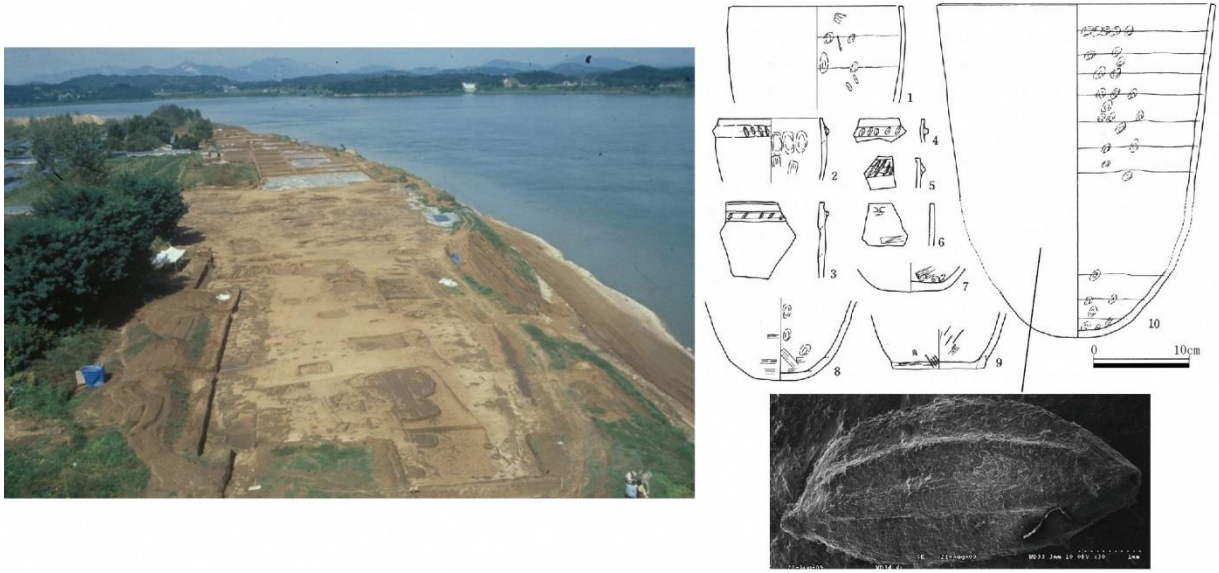


图6 河南 漢沙里遺跡 (高麗大学校発掘調査団、中村 2012)

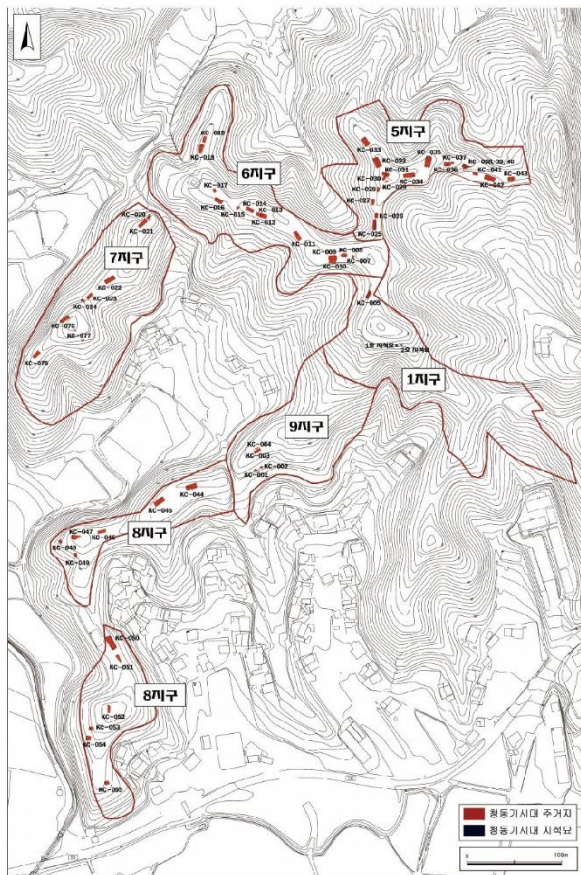
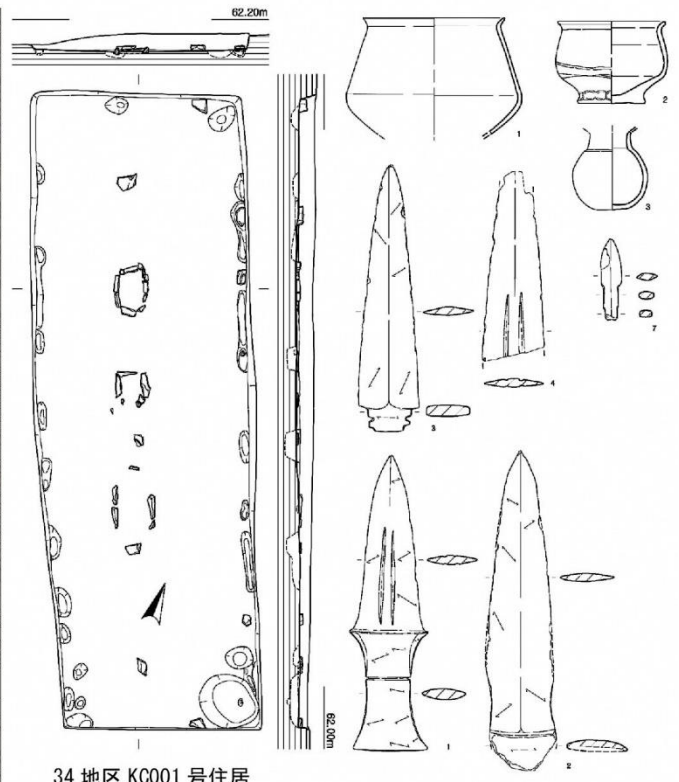


图7 燕岐松院里の集落 (韓国考古環境研究所 2010)



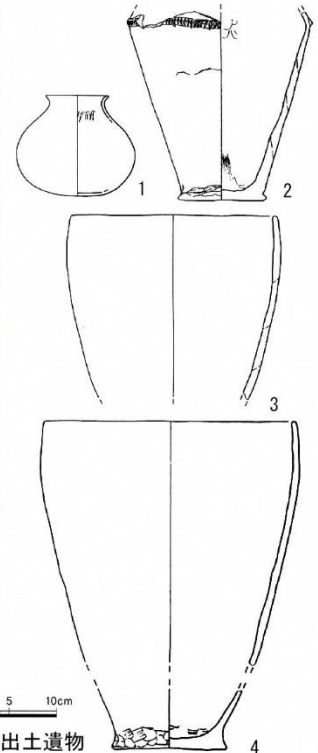
34 地区 KC001 号住居

(住居 : S=1/120 土器 : S=1/8 石器 : S=1/6)

图8 燕岐松潭里の住居と出土遺物 (韓国考古環境研究所 2010)



図9 晋州大坪里漁隠1地区の集落と畠（東亜大学校博物館 1999）



環濠出土遺物

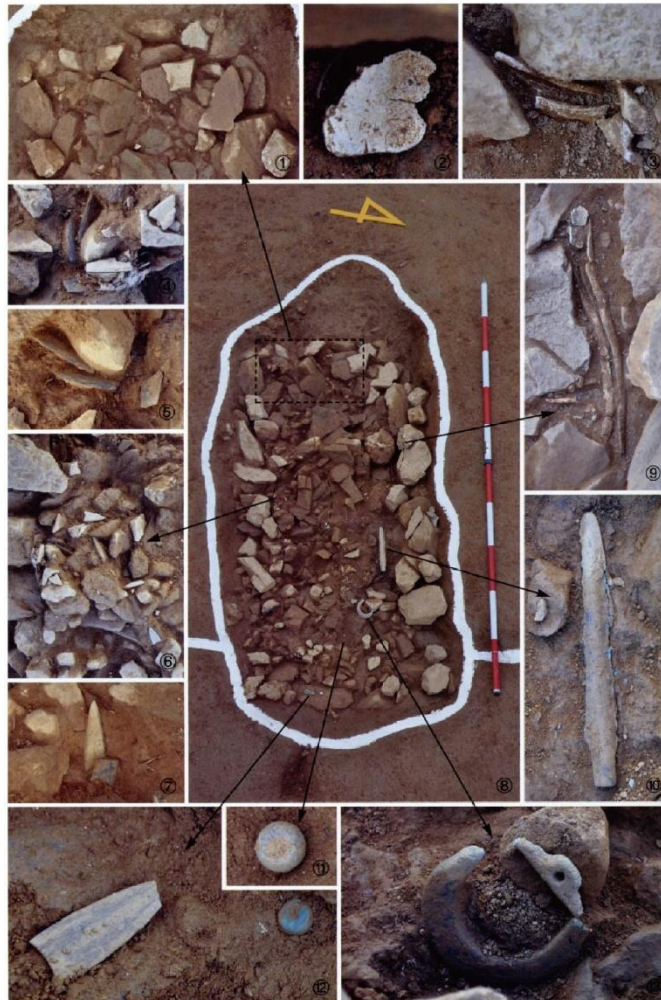


図11 広州駅洞の石槨墓と遼寧式銅劍（ハノル文化遺跡研究院 2012）

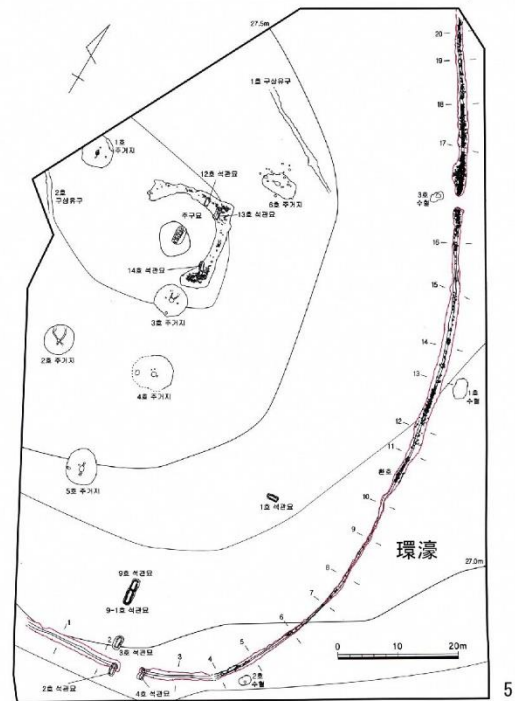


図10 馬山網谷里（慶南発展研究院 2009）



図12 金海 龜山洞支石墓（中村撮影）

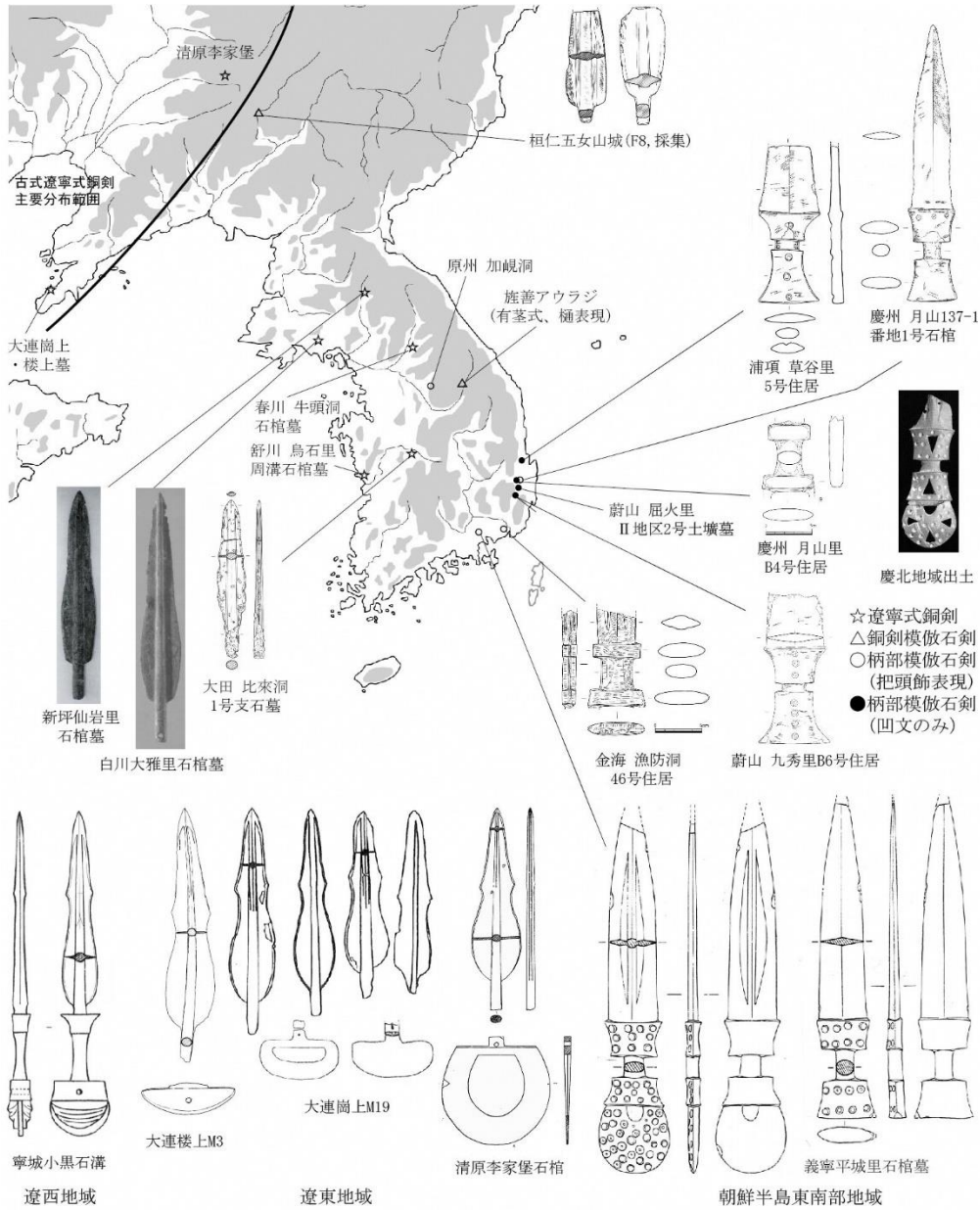
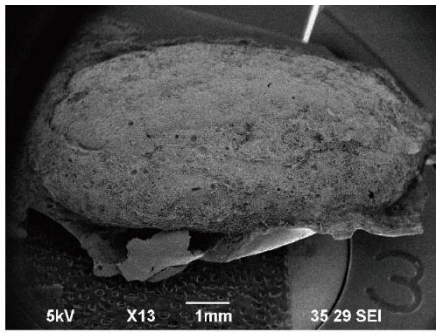


図13 遼寧式銅劍とその模倣石劍(中村2012, S=1/8)

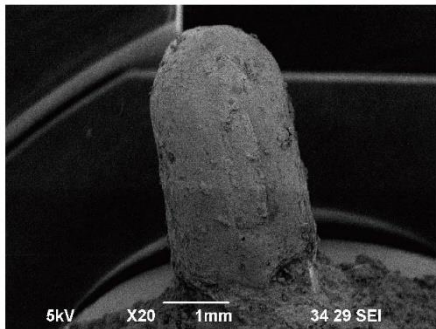


a. 晋州 大坪里 (国立晋州博物館 2002) b. 麗水 平居洞夕群 2号 (全南大学校博物館 1993)

図14 青銅器時代の副葬品



a. 長野 上向遺跡 (縄文中期後葉)



b. 長野 梨久保遺跡 (縄文中期後葉)

図 15 縄文時代のマメ類 (会田進・中沢道彦氏提供)

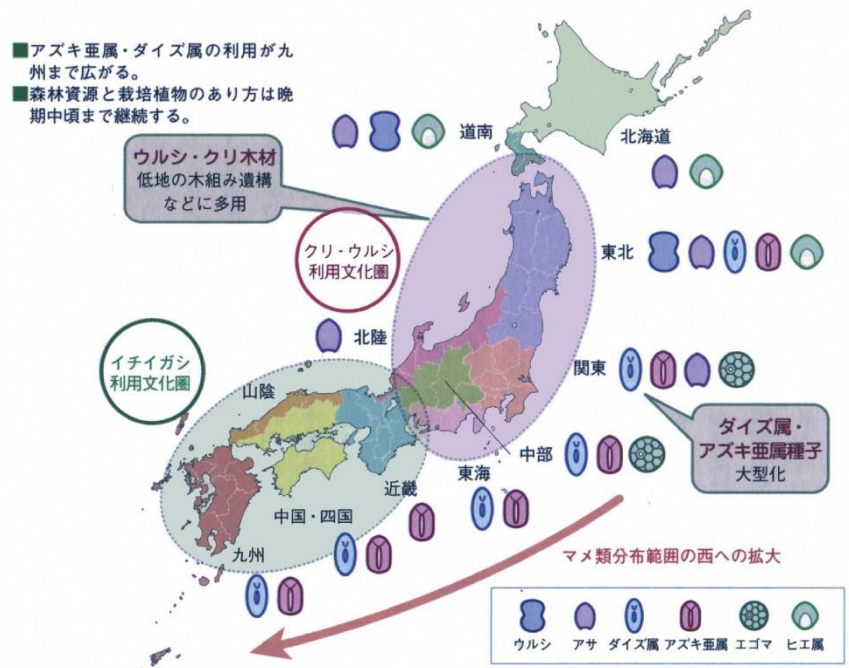
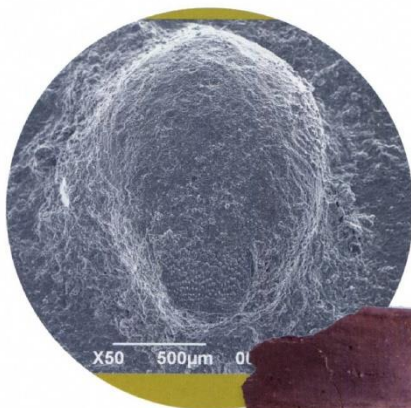


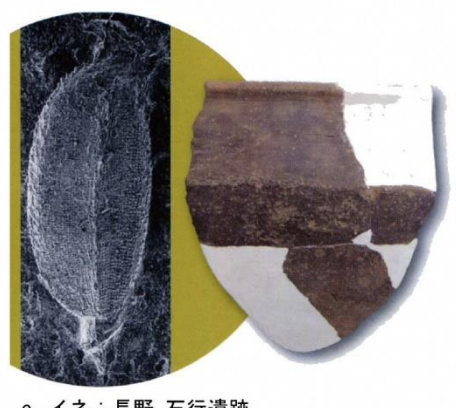
図 16 マメ類利用の拡散 (佐々木 2014)



a. アワ: 福岡 江辻 SX01



b. イネ: 島根 板屋Ⅲ遺跡



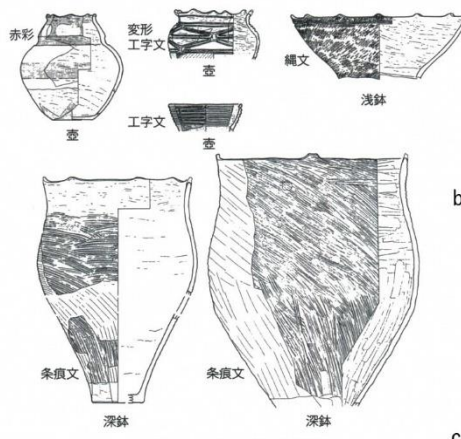
c. イネ: 長野 石行遺跡

季刊考古学 135 号のカラー口絵: 中沢道彦構成

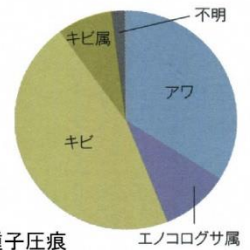
図 17 日本各地の最古級穀物圧痕



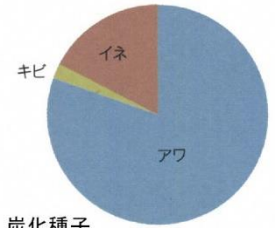
図 18 徳島 庄・蔵本遺跡の畠 (『徳島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』より)



a. 出土土器 (S=1/12)



b. 種子圧痕



c. 炭化種子

b・c: 佐々木・能城 2017 より

図 19 神奈川 中屋敷遺跡の様相 (横浜市歴史博物館・他 2017)

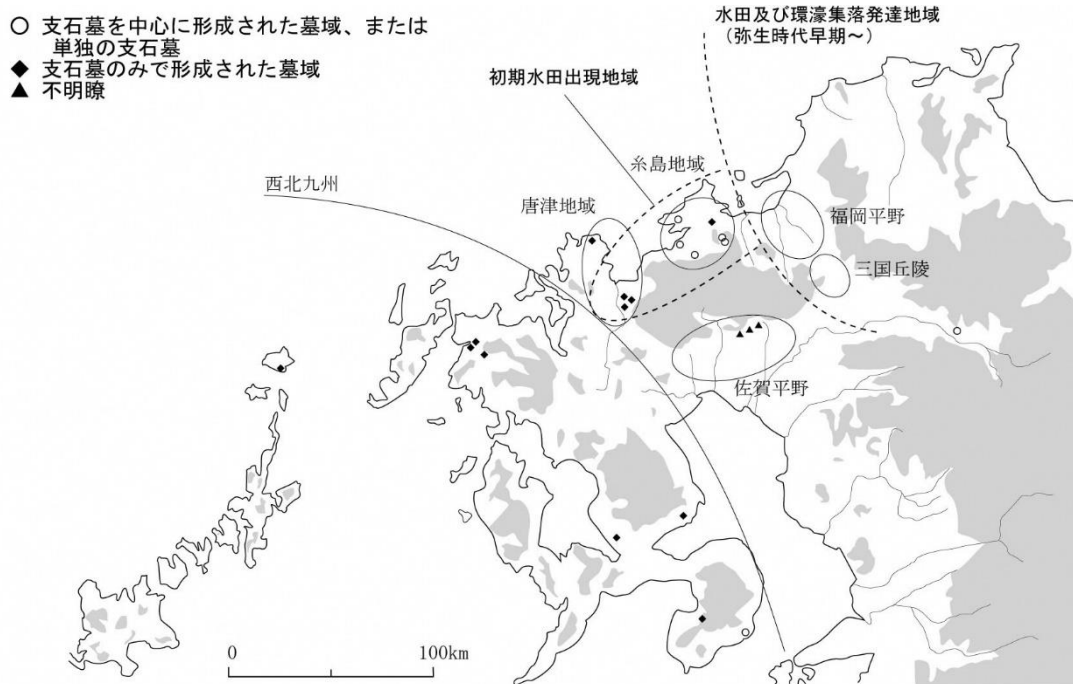


図20 北部九州の支石墓の分布と地域性 (中村2016)

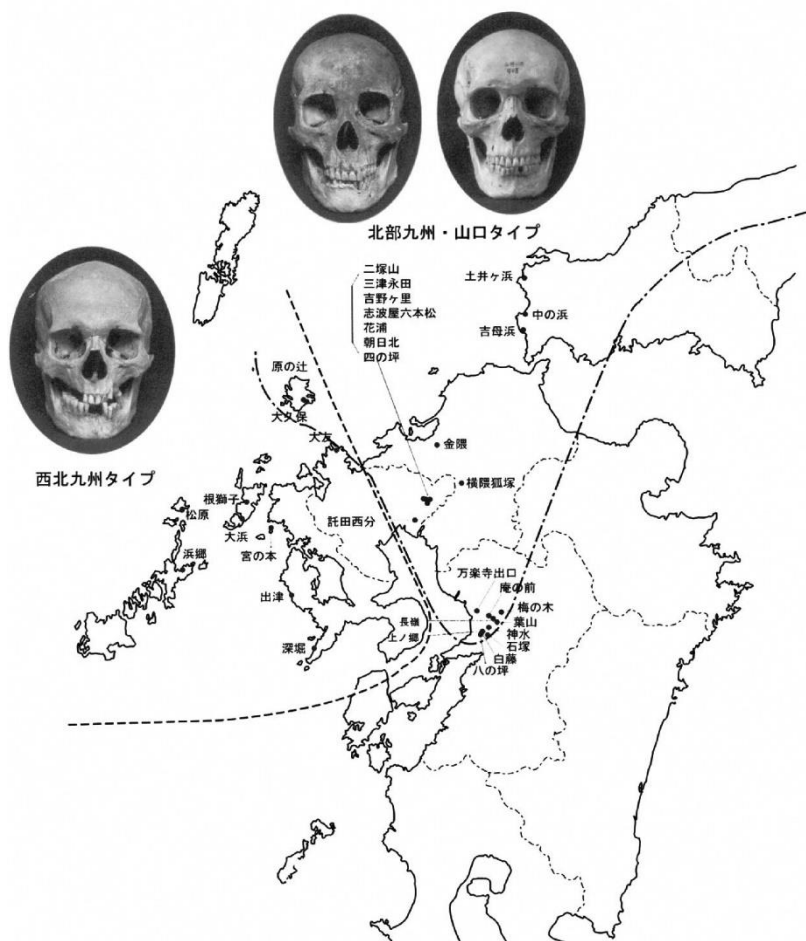


図21 弥生人の地域性 (大阪府弥生文化博物館2011)



図22 日韓の副葬小壺の配置 (中村2012)